

北山小学校遺跡

福岡県八女郡立花町所在遺跡の調査報告

立花町文化財調査報告書

第5集

1993

立花町教育委員会

きたやましょうがっこう
北山小学校遺跡

たちばなまち
立花町文化財調査報告書

第5集

1993

立花町教育委員会

序

ここに報告する北山小学校遺跡は、平成4年7月、北山小学校の改築に伴い、その敷地内の発掘調査を実施したものです。

この周辺には、小倉谷横穴墓、茶臼塚古墳（前方後円墳）が存在し、これらとの関連性と遺跡の性格把握のためには大変重要な調査となり、貴重な資料を得ることができました。この報告書が文化財の保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりまして、南筑後教育事務所の伊崎先生はじめ、発掘作業に携わっていただいた多くの方々のご指導、ご協力を賜りました。ここに、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月31日

立花町教育委員会

教育長 末 継 敬一郎

凡例

1. 本書は、立花町^{たちばなまち}が平成4年度に発掘調査を行った北山小学校遺跡^{きたやましょうがっこう}の報告書であり、立花町文化財調査報告書の第5集にあたる。
2. 調査は立花町教育委員会が主体となり、福岡県教育庁南筑後教育事務所の援助を受けて実施した。
3. 調査中の図面は鶴木栄子・鶴木洋子・清原やヨイ・秋山幸子・梅野孝子・原美智子・平和美・伊崎俊秋が実測し、写真は伊崎が撮影した。
4. 挿図における方位は磁北である。
5. 出土遺物の実測は九州歴史資料館の横田義章と伊崎が行った。
6. 出土遺物の写真は北岡伸一と伊崎が撮影した。
7. 遺構・遺物の図面の浄書は豊福弥生・原カヨ子・伊崎が行った。
8. 本書の執筆はSX14出土の礫器を横田が、それ以外を伊崎が行い、伊崎が編集した。

目次

I. 序論	1
1. はじめに	1
2. 立花町の概要	2
II. 遺跡の環境	3
1. 遺跡の立地	3
2. 町内の指定文化財	3
3. 調査の行われた遺跡等	5
4. 周辺の遺跡	8
III. 遺構と遺物	13
1. 概要	13
2. 土壌	14
3. 不整形土壌	14
4. 出土遺物	21
IV. おわりに	24

I. 序論

1. はじめに

立花町立北山小学校は明治11年に創立された歴史のある古い学校である。しかしその校舎は昭和33年3月に現在地に移転新築されて以降30余年を経ており、老朽化は著しいものがあつた。そこで町としては校舎の改築を企図し、平成4年度から工事にはいることで計画を進めてきたのであつた。しかるにこの北山小学校の存する台地は“小倉谷遺跡Ⅰ”として遺跡に登録されていること^(註1)もあり、埋蔵文化財について立花町教育委員会は南筑後教育事務所と協議をすすめ、校舎解体後の工事開始前に試掘を行ってから対応することとした。

平成4年度になって計画はいよいよ具体的にすすめられることとなった。それは、5月頃から校舎の解体を行い、学校が夏休みの間に基礎のパイルを打ち終わりたいというものであつた。この意向をうけて、4月14日に打合わせを行い、4月26日(日)に試掘を実施した。その結果、柱穴等を検出したので本調査が必要となり、4月30日に再度打合せを行って、6月から発掘調査にはいることとした。校舎が解体されたのは6月中旬であり、そののち6月23日より重機を投入し、7月1日から発掘作業を開始した。そして7月22日には調査を終了した。調査面積は約1117㎡であり、調査にかかる費用は全て町が負担した。

調査の関係者は次のとおりである。

立花町教育委員会 教育長 末 継 敬一郎

社会教育課	課 長	武 田 行 夫
社会教育係	係 長	山 田 学
同和教育係	係 長	久 保 俊 治
	主 査	江 上 チヅ子
	主 査	中 尾 八重子
	主任主事	平 島 隆 夫
	主任主事	平 島 道 啓

学校教育課	課 長	中 村 大 吉
学校教育係	係 長	佐 藤 進
	主 査	松 尾 由美子

福岡県教育庁南筑後教育事務所 技術主査 伊 崎 俊 秋

発掘調査においては、福岡県文化財保護指導委員の佐々木四十臣氏には現地においてご指導を受けた。また、北山小学校の西江九州男校長ほか学校職員の方々にもお世話になった。お礼申し上げます。調査に従事していただいたのは次の方々である。

野中良介・甲木行雄・由布豊昭・井上幸雄・鶴木栄子・鶴木洋子・清原やヨイ・鶴木ヤス子・鶴木絹子・秋山幸子・由布芳子・野中栄子・梅野孝子・原美智子・近見クニエ・平和美

2. 立花町の概要

大正・昭和の洋画壇で名声を博した田崎廣助画伯は1898（明治31）年、現在の立花町北山に生まれた（1984－昭和59年没）。氏は1975（昭和50）年には文化勲章を受賞され、その栄のもとに翌1976年には立花町の名誉町民となられた。その生家は北山に残されている。立花町が生んだ偉人のひとりといってよいだろう。

その田崎画伯がこよなく愛し描いた飛形山（とびかたやま：標高450m）は町のほぼ中央にそびえており、まさしく町のシンボルとなっている。その立花町は、1955（昭和30）年4月1日に光友村・北山村・白木村・辺春村が合併して成立した。福岡県の南部にあり、熊本県と境を接する町である。

立花町の大半は山間部であり、森林が町の約36％を占めていて平野部はごく少ない。しかし、その山の斜面は畑地に開墾され、みかん・キウイフルーツなどの果樹栽培が行われている。そのほか、小梅・たけのこ・茶・ナスなどの生産も盛んである。就中、みかんは「橘」から町名の由来ともなったように古くから栽培・生産されており、県内生産額では断然トップを占めていて（平成2年で26億2900万円）、独自にみかん罐詰工場も有している。また、全国の10％強を占める生産量のあるキウイフルーツを原料として1991年からはワインもつくられている。

町の木は橘、花はみかんを定めており、ともによく町を象徴する植物といってよい。

人口は14330人（1992. 3. 31現在）で、漸減の傾向にある。

なお、町の出身者にはさきにあげた田崎廣助画伯のほか、やはり画家の田崎昭作氏、スペイン舞踊家の山本王子氏、立体造形家の馬場金作氏、書道家の平島桂仙氏などがおられる。

さらに、『蒼ざめた馬を見よ』で1967年、第56回直木賞を受賞した五木寛之も少年時代をこの町ですごしている。^{（註2）}

“福岡県と熊本県の県境に小栗峠という峠がある。峠と言っても幹線国道の一部であるから、以前から自動車の往来が激しかった。

あれは何年だったか、はっきり憶えていないが、敗戦後、外地から引揚げてきてしばらくたった頃、父親と二人、その峠で暮らしていた時代があった。

小栗峠、と地図にはのっているが、なぜか地元では山中峠とその峠を呼んでいた。当時は、峠の付近には人家ひとつなく、急なカーブの多い坂を車や人があえぎながら登ってきて、やっとたどりつくような山奥だった。…………”

《『地図のない旅—第二部 過去への旅—ある時代の終り1—』

（集英社文庫版）より》

II. 遺跡の環境

1. 遺跡の立地 (Fig. 1)

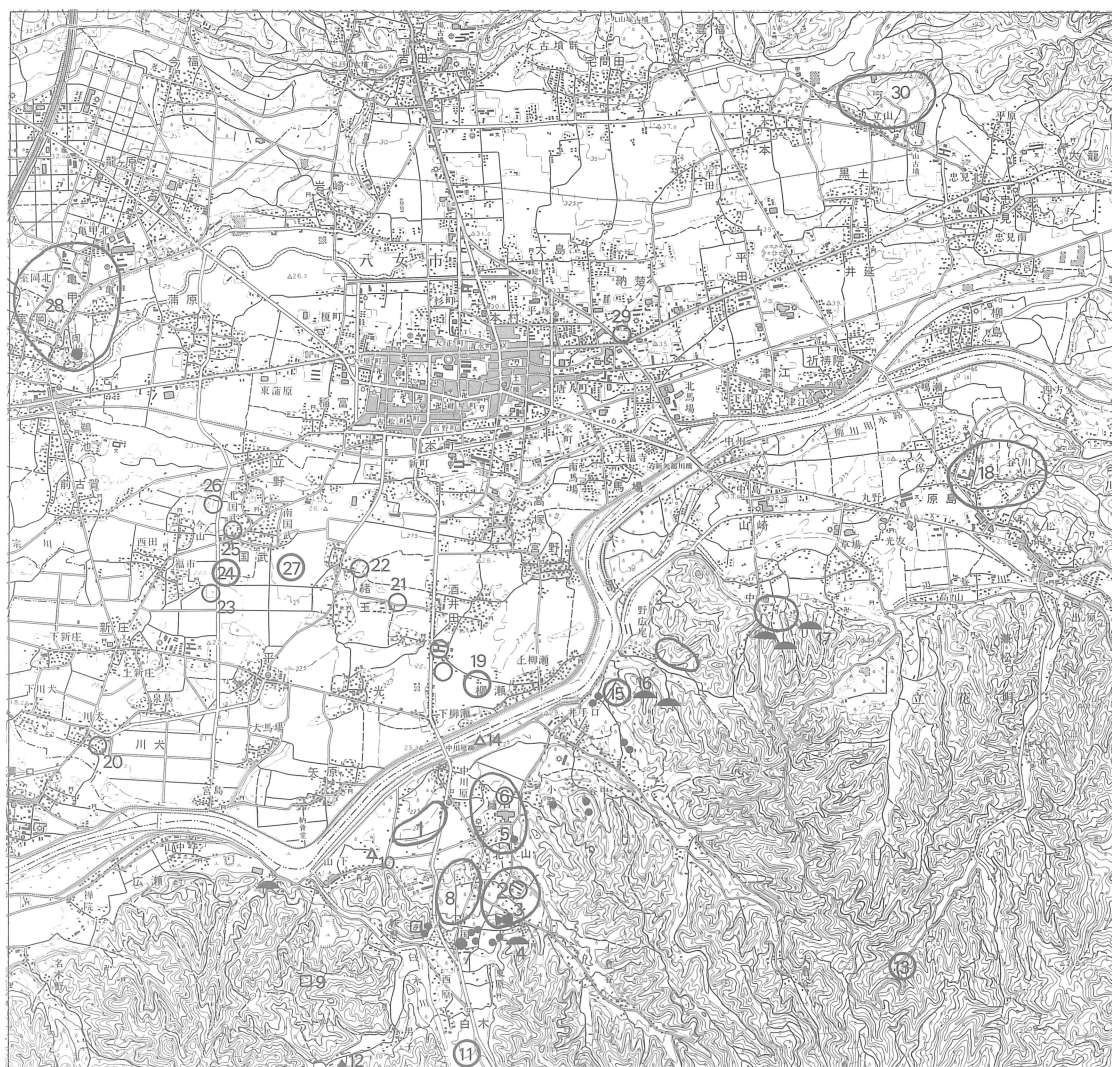
筑肥山地は九州山脈から西に派生した山系であり、福岡県（筑後）と熊本県（肥後）とを隔てている。その山地の北方を矢部川が西流し有明海に注ぐ。立花町は矢部川中流の左岸域を占めていて、東経130°32′～40′、北緯33°06′～13′の所にある。北山小学校遺跡は町の西方、白木川右岸の洪積台地上にあり、標高43m前後に立地する。

所在地：福岡県八女郡立花町大字北山2838

2. 町内の指定文化財

立花町内にある国・県・町の指定文化財は以下のとおりであり、指定解除となっているのは水害により流失したものである。これら以外の未指定物件の中にも貴重な文化財が多々あることはいうまでもない。町の文化財保護条例は1982（昭和57）年3月16日に制定されている。

・国指定……松延家住宅	【重要文化財 <建造物>】	1977. 1. 28指定
・県指定……円福寺のビヤクシン	【天然記念物】	1958. 10. 29指定
ハクモクレンとタイザン木の癒着木	【天然記念物】	1958. 10. 29指定
筑後手すき和紙	【無形文化財】	1972. 11. 18指定
・町指定……谷川寺木造仁王像	谷川565	【彫刻】 1983. 7. 20指定
黒岩橋	上辺春黒岩	【建造物】 1984. 3. 1 指定
古小原橋	上辺春小原	【建造物】 1984. 3. 1 指定
		→1990. 7. 15指定解除
大塚古墳	北山上ノ原	【史跡】 1984. 3. 1 指定
浦田古墳	谷川455－II	【史跡】 1986. 10. 14指定
鬼隈横穴群	山崎780－I	【史跡】 1987. 10. 6 指定
里程標示石柱（四里石）	北山鋤崎	【考古資料】 1988. 9. 10指定
前河内橋	上辺原前河内	【建造物】 1990. 5. 1 指定
古立石橋	上辺春	【建造物】 1990. 5. 1 指定
熊ノ川橋	上辺春	【建造物】 1990. 5. 1 指定
		→1990. 7. 15指定解除
小原橋	上辺春	【建造物】 1992. 5. 13指定
仁合石橋群	兼松	【建造物】 1992. 5. 13指定



- | | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 北山今小路遺跡 | 6. 北山清浄田遺跡 | 11. 白木西原遺跡 | 16. 稻荷山横穴群 | 21. 深田遺跡 | 26. 篠原遺跡 |
| 2. 北山小学校遺跡 | 7. 大塚古墳 | 12. 男ノ子焼窯跡 | 17. 鬼隈横穴群 | 22. 池上遺跡 | 27. 前田遺跡 |
| 3. 茶臼塚古墳 | 8. 上ノ原遺跡 | 13. 西谷遺跡 | 18. 辻遺跡 | 23. 中里遺跡 | 28. 室岡遺跡群 |
| 4. 小倉谷横穴群 | 9. 山下城跡 | 14. 千間土居 | 19. アモメ遺跡 | 24. 大坪・前田遺跡 | 29. 赤氏遺跡 |
| 5. 今出坂古墳 | 10. 四里石 | 15. 曲松遺跡 | 20. 川犬古墳群 | 25. 松本遺跡 | 30. 立山山遺跡 |

Fig.1 立花町周辺遺跡位置図 (1/50,000)

3. 調査の行われた遺跡等

町内において、手続きをふんだ埋蔵文化財の発掘調査はこれまでに7件がおこなわれているが、それらは古墳と横穴群の調査が大半である。それ以外にもいくつかの遺跡が知られているので、それを以下に紹介しておこう。

おおつか (註3)

大塚古墳は町指定へ向けての資料を得ることを目的として、1983(昭和58)年12月に調査された。巨石を使った複室の横穴式石室を主体部とし、周溝を含めると直径38mにもなる大きな円墳である。6世紀後半に築造されたものである。

ちやうすづか (註4)

茶臼塚古墳は立花町内における唯一の前方後円墳である。発掘はなされていないが測量調査のみを1983年に行った。全長34.5mを測る小規模なもので、採集された須恵器や埴輪から6世紀中頃の築造と考えられる。

よこまつ (註5)

曲松遺跡はキウイ団地造成に先だって1984年1～2月に調査された。弥生後期中頃の竪穴住居跡1軒と同後半～末の箱式石棺墓4基・甕棺墓26基が検出されており、特に甕棺墓が群をなして検出されたことは注目される。

いなりやま (註6)

稲荷山横穴群もキウイ団地造成に伴って1984年2月に2基が調査された。6世紀後半に築造され、7世紀中頃まで追葬されている。

うらた (註7)

浦田古墳は農道の整備に関連して1985年10月に調査された。複室の横穴式石室を有する直径14mの円墳で6世紀後半に築造されたものである。

おにくま (註8)

鬼隈横穴群は1986年11～12月に、町史跡指定へ向けて整備するために調査された。6世紀中頃～後半に築造され、6世紀末～7世紀中頃まで追葬されている。

こぐらたに (註9)

小倉谷横穴群は宅地造成に先だって四次にわたって調査されている。第1次は1987年で1基、第2次は1988年で1基、第3次は1989年11月～1990年1月で20基、第4次が1991年1～2月で3基、以上の総計25基が検出された。6世紀後半以降に築造されたものであり、すぐ近くに存する茶臼塚古墳との関係など注意されるところである。それにいわゆる肥後タイプと称されるコの字形の屍床をつくりだした横穴の存在は注目してよい。

上述の7件に加えて、1992年には北山小学校遺跡と北山今小路遺跡が調査された。

きたやまいまこうじ (註10)

北山今小路遺跡は県営圃場整備事業に先立つ調査である。縄文時代晩期の埋甕と包含層、そして弥生時代中期から古墳時代初頭に及ぶ200軒に近い数の竪穴住居群や弥生終末期の甕棺・木棺墓群、5～6世紀代の住居群、中世の溝などの遺構が検出された。特に弥生時代後期中頃から終末にかけての大規模な集落が確認されたことは特筆される。この時期では、集落を区画するらしい溝があり、そこからは土器編年上あるいは地域間交流を知る上での良好な資料として大量の土器が出土している。また30数点出土した石包丁の中に、孔がなくて両端に抉りのあるものが2点みられた。これは瀬戸内地方との交流を知る資料である。鉄器も数十点が出土しているが、砥石が非常に多く見られることはネガティブながら鉄器が普及していたことの証拠と

考えてよいだろう。石杵が住居跡・溝から出土し、かつベンガラが住居内床面に見られたことなども特記してよい。

ちなみに、大字谷川に所在する辻遺跡は弥生時代の遺跡としてリストアップされているが、^(註11)そこからは弥生後期中頃の土器が採集されている。立地も時期も北山今小路遺跡とほとんど同じであるから、弥生後期の段階で矢部川左岸にもいくつかの集落が存在したことは確かである。また、同じような時代の遺跡として矢部川右岸の八女市域でも、室岡遺跡群（西中ノ沢・坊野・野口・道添）^(註12)のほか、ここ近年において六反田、中里、大坪・前田、篠原、松本、赤氏、京田・^(註16)深田などの遺跡が知られてきている。いまや“邪馬台国”の時代のクニがこの八女地方にも存したであろうことは確実とみられ、そのクニの実態の解明が今後の重要課題であろう。

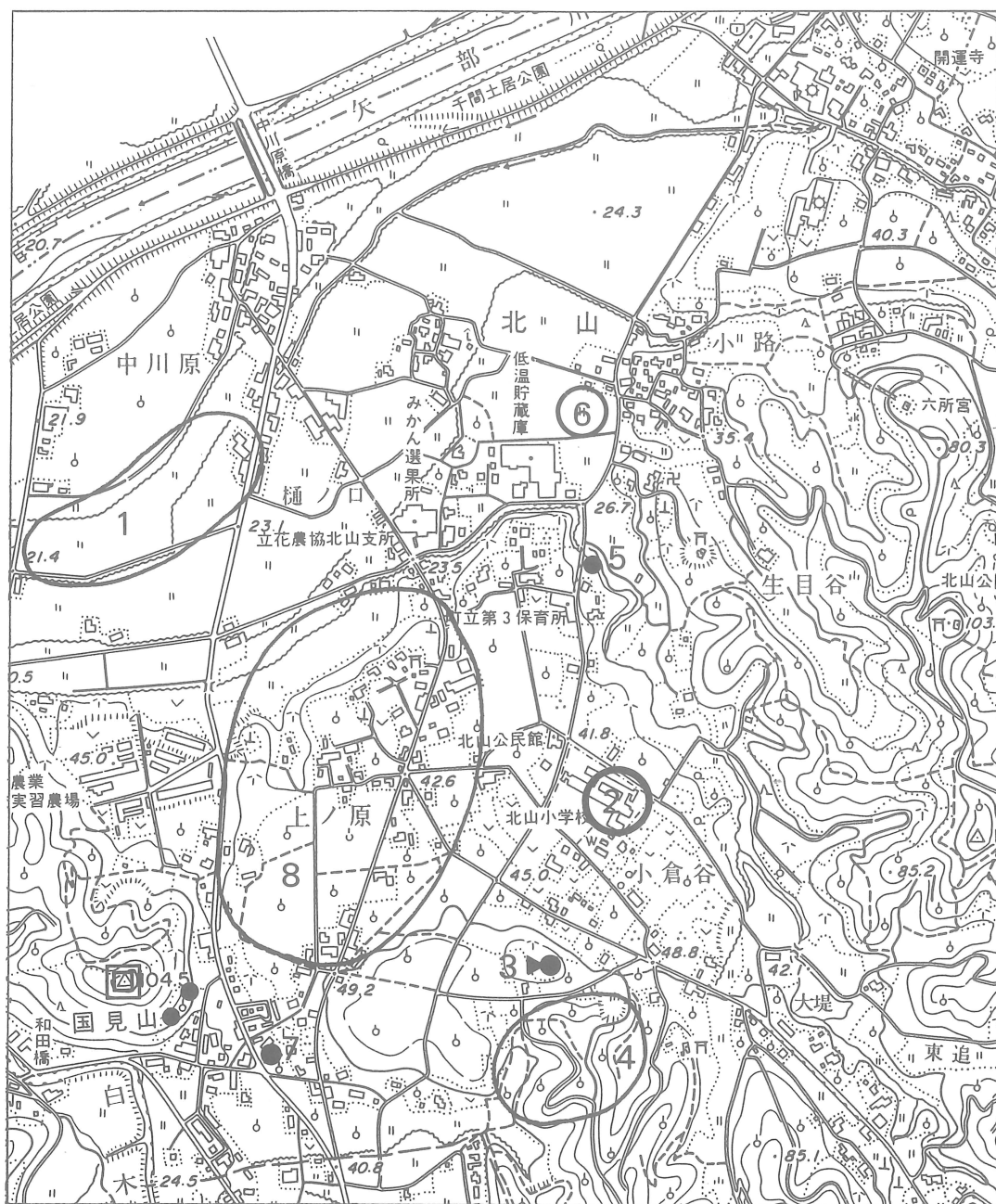
以上のほかに、古く立花町内の遺跡・遺物を取りあげて報告したものもいくつかある。まず大正末期の古墳分布調査において、北山村の大塚・茶臼塚・関白塚と、字蛇田にある名称なしの2基が紹介された。^(註17)また「福岡県の横穴」においては、北山村ヘミタの横穴は馬が通行している時に足を落としこんで発見されたことを伝えている。それは蛇田（ヘビタ）のことであり、現在の北山字小倉谷の周辺にあたる。さらに“八女郡北山村矢部川沿岸の古墳出土の土偶”として、山下にある水神社の社上の丘に営まれた古墳から出たという埴輪などが写真とともに紹介されている。^(註19)

近年においては、筑後考古学研究会会員諸氏等による踏査記録がある。その結果は古墳分布図の作成や、採集した石斧の紹介、^(註20)稲荷山横穴群採集須恵器が八女市中尾谷窯跡群から供給されたものであることの提示など、幅広い研究活動報告となっていて益するところが多い。^(註21)

ところで、浅野陽吉氏の『筑後陶甕考』では、男ノ子焼の窯跡を昭和9年に訪ねたことを紹介している。^(註22)いま現地では若干の焼土と陶磁器片の採集される所があって窯跡が存したらしい痕跡を見るけれども、記述してある内容からすると、あるいは谷をはさんで2ヶ所に窯跡が存した可能性もある。男ノ子焼は陶器で茶壺や茶甕などがあるとされてきたが、採集された破片に陶器ばかりでなく磁器もみられる点は重要であろう。

以上のほかには、立花町には未調査の横穴が多くある点に注意しておかねばなるまい。その他では中世の山城跡が7ヶ所ほどあること、また町指定文化財にてもわかるように眼鏡橋が特に^(註23)辺春川に多いことも注目される。さらには、矢部川南岸の曲松地区から山下地区までの約1300間（約2400m）には、柳川藩の普請奉行・田尻総馬が築かせたという千間土居が楠の木とともに今もあり、「かくし羽根」といわれる土塁も残っている。^(註24)

なお、久留米藩士の矢野一貞が著した『筑後將士軍談』には城館跡や岩戸山・石人山等の古墳が多くとりあげられて詳しい説明がなされているが、上妻郡南領の項で現在の立花町に関わるものは城跡が7ヶ所、墳墓碑塔部では2ヶ所（山下町麟久寺碑、谷川村首塚）がとりあげられているにすぎない。^(註25)



- | | |
|------------|------------|
| 1. 北山今小路遺跡 | 5. 今出坂古墳 |
| 2. 北山小学校遺跡 | 6. 北山清浄田遺跡 |
| 3. 茶臼塚古墳 | 7. 大塚古墳 |
| 4. 小倉谷横穴群 | 8. 上ノ原遺跡 |

Fig. 2 北山小学校遺跡位置図 (1/10,000)

4. 周辺の遺跡 (Fig.1)

北山小学校遺跡では縄文時代の遺構・遺物が検出されたので、ここでは近在の遺跡のうち、矢部川対岸の八女市なども含めて関係ある部分を概観しておこう。

旧石器時代は山門郡瀬高町獅子穴遺跡^(註26)でナイフ形石器が、八女市立山山遺跡^(註27)で細石刃が出土している程度でまだ多くは知られていない。プロピライト製の打器(チョッパー)は縄文時代^(註28)と旧石器時代の両方に属するものが含まれるとの見解がある。

縄文時代では、上ノ原遺跡^(註29)が押型文土器が出土したことになっているが、この遺跡は北山小学校遺跡と一連のものと考えてよいだろう。今小路遺跡では先述のように晩期の埋甕と包含層とが存した。明確には検出できなかったが、本来は住居跡もあるとみてよい。

八女市南部地区県営圃場整備事業地内の大字新庄・国武・緒玉・柳瀬に所在する六反田遺跡^(註30)・大坪遺跡^(註31)・池上遺跡^(註32)などでは、住居跡や石組炉、土壙といった押型文土器の時期の遺構が、またアモメ遺跡^(註33)では後期の住居跡が検出されている。特に池上遺跡の円形竪穴遺構とされるものは北山小学校遺跡のそれと同じとみてよいだろう。アモメ遺跡^(註34)での後期の竪穴住居跡群は該期の集落構成を知るうえで重要な資料である。また、上柳遺跡では落し穴状遺構4基が5m前後の間隔で検出されている。ここは標高19mほどの平野部であり、その立地が注意されるところである。

総体に、旧石器時代・縄文時代の遺跡はまだ検出例が少ないが、今後の発掘調査の進展とともにその数も増えてくるものとみられる。

【立花町出土遺物の紹介】 (Pl.10, Photo.1, Fig.3)

ここで、町に保管されている遺物に関して紹介しておこう。

大字兼松字西谷の古賀長氏所有地を開墾中に出土したという2本の鉄鋌がある。ともに鍛造品と思われ、原表面を残す資料(1)は長さ19.7cm、重さ1680gをはかる。そこからは須恵器なども採集されたというが詳細はわからない。古墳から出土したと考えるのが最も自然ではあるが、地形からすれば別の遺構であった可能性の方が高いといえよう。きわめて重要な資料であることはまちがいない。ここを小字名をとって西谷遺跡としておこう。^(註35)

また同じ古賀氏の寄贈になる骨蔵器かと思われる2個の土器・陶器がある。3は須恵質の両耳付細頸壺であり全体に白っぽい焼き上がりなす。復原口径13.8cm、肩部径22cm、底径14.8cm、器高30.8cmを測る。外面は格子目と平行のタタキの上を少しなでた程度で粗々しい面を残したままである。底面には径10cmの焼成前穿孔がある。口頸部の一部を欠くのみでほぼ完形品である。肩の張り、耳の付き方などが均整よくなされており整美な土器といえよう。肥後は小岱山麓の窯で平安時代中期に焼かれた可能性が指摘される。^(註36)4は黄釉のかかった陶器の壺である。口径12.8~13.3cm、胴径19.2cm、底径11.8~12.3cm、器高25.2cm。肩部・胴部に沈線が巡

る。内面は上半部の格子目当具痕をなで消しておらず、外面もタタキ痕の見える所があって、つくりとしてはやや雑である。輸入陶磁器の可能性もないではないが、国産であると考えerほうが妥当のように思われる。

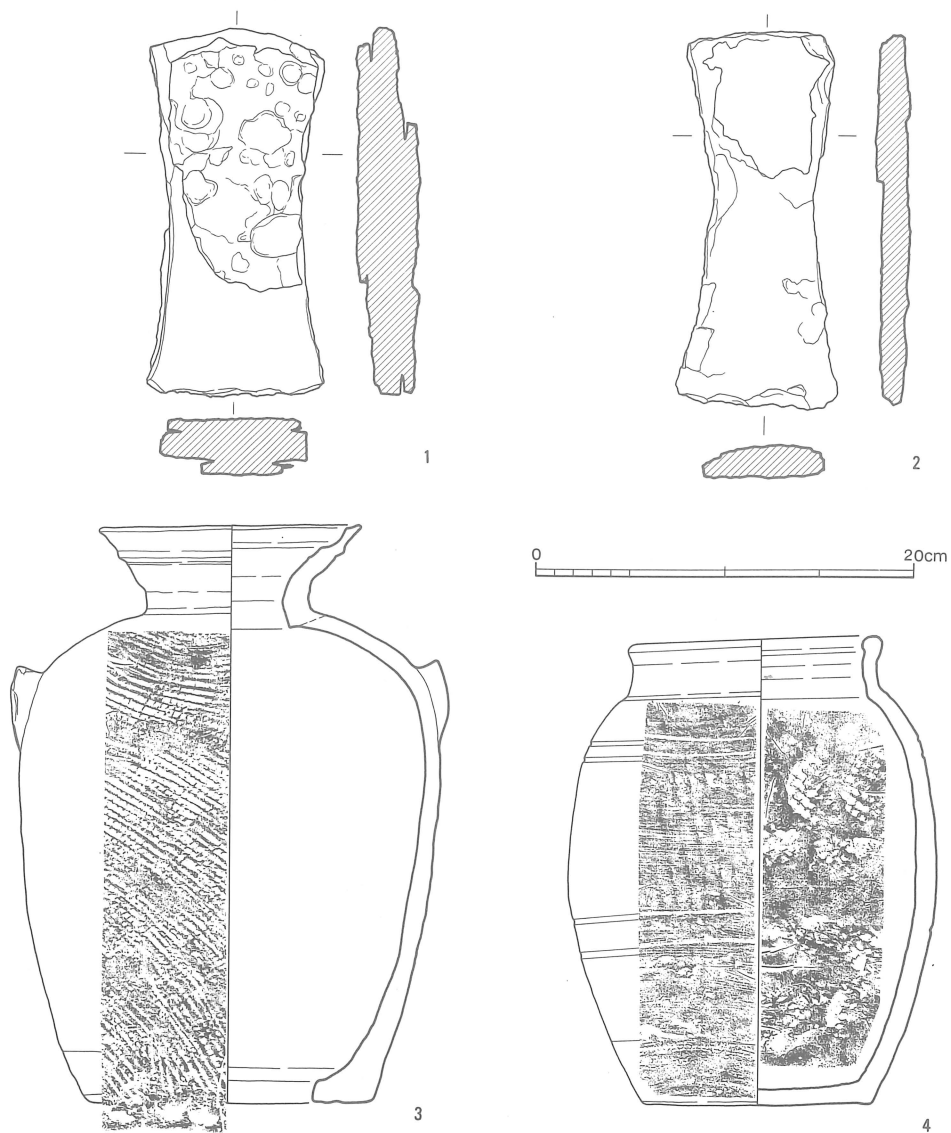


Fig. 3 立花町出土鉄鋌・土器・陶器実測図 (1/4)

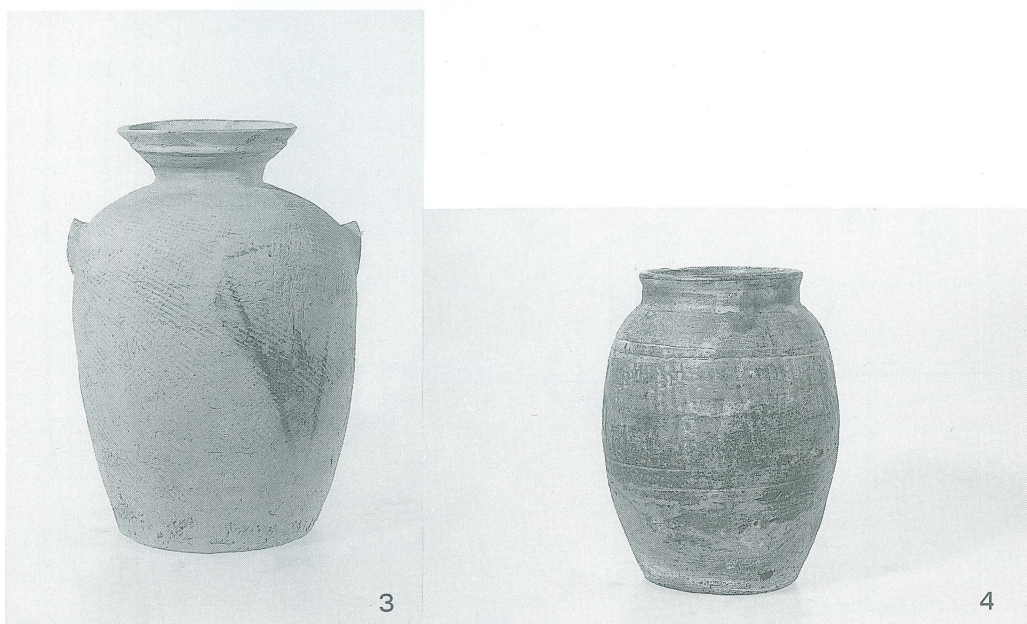
註

1. 福岡県教員委員会『福岡県遺跡等分布地図（八女市・八女郡編）』 1980
2. 氏のエッセイ集『午後の自画像』（角川書店、1979年7月）におさめられた「十四歳の日記」にもその頃の話が出てくる。
3. 立花町教育委員会『大塚古墳』 立花町文化財調査報告書 第1集 1984
4. 立花町教育委員会『大塚古墳』 立花町文化財調査報告書 第1集所収 1984
5. 立花町教育委員会『曲松遺跡』 立花町文化財調査報告書 第2集 1985
6. 立花町教育委員会『大塚古墳』 立花町文化財調査報告書 第1集所収 1984
7. 立花町教育委員会『立花町の文化財』 1989
8. 立花町教育委員会『鬼隈横穴群』 立花町文化財調査報告書 第3集 1987
9. 立花町教育委員会『小倉谷横穴群』 立花町文化財調査報告書 第4集 1991
10. 1992年7月～12月に立花町教育委員会が県営圃場整備事業に先だって発掘調査を実施した。
立花町教育委員会『北山今小路遺跡Ⅰ』立花町文化財調査報告書 第6集 1993
11. 註1に同じ
12. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XIX－』 1977
また八女市教育委員会が1991・92年に室岡工業団地内遺跡として調査を行った。
13. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報』
八女市文化財調査報告書 第18集 1989
14. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報2』
八女市文化財調査報告書 第19集 1990
15. 八女市教育委員会『赤氏遺跡』 八女市文化財調査報告書 第20集 1991
16. 八女市教育委員会『八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報3』
八女市文化財調査報告書 第23集 1992
17. 石橋為次「八女郡古墳調査表」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第3輯 1928
18. 島田寅次郎「福岡県の横穴」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第9輯 1934
19. 島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第13輯
20. 山下雄・古賀正美「八女古墳群分布調査報告（Ⅱ）」 筑後考古 第8号 1979
21. 中村勝「八女郡立花町の遺跡と遺物」 筑後考古 第9号 1984
22. 浅野陽吉『筑後陶甕考』 1944
23. 杉森彬『郷土は語る5（立花町文化財めぐり）』立花町教育委員会 1983
杉森彬『立花町の眼鏡橋』 1981
梅崎英昭「筑後地方の眼鏡橋について」 筑後考古 第8号 1979
24. 近本喜續『矢部川の歴史 水利編』 1992
25. 矢野一貞『筑後將士軍談』[嘉永6年（1853）著……1926年翻刻、1972年復刻]
26. 古代學協會・平安博物館『福岡県山門郡清水山遺跡群の調査』 1984
27. 八女市教育委員会『立山山古墳群』 八女市文化財調査報告書 第10集 1983
28. 註26に同じ
29. 註1に同じ
30. 註13に同じ
31. 註14に同じ
32. 註16に同じ
33. 1992年7月～1993年1月に八女市教育委員会が発掘調査を実施した。縄文後期の竪穴住居跡は20数軒ほどが検出されている。中川寿賀子氏の御教示による。

34. 八女市教育委員会『上柳遺跡』 八女市文化財調査報告書 第21集 1991
35. 川述昭人氏、横田義章氏の御教示を得た。また、遺跡の所在地については立花町広報係の川島幹夫氏から御教示を得た。
36. この土器については赤司善彦氏より御教示を得た。

〈参考文献〉

- ・杉森彬『春華秋実－立花町の村々－』 1990
- ・鶴記一郎『矢部川の地名の旅』 1981
- ・八女市史編纂専門委員会『八女市史 上巻』 1992
- ・立花町史編纂委員会『立花町史年表』 1991



Phot. 1 立花町出土土器・陶器

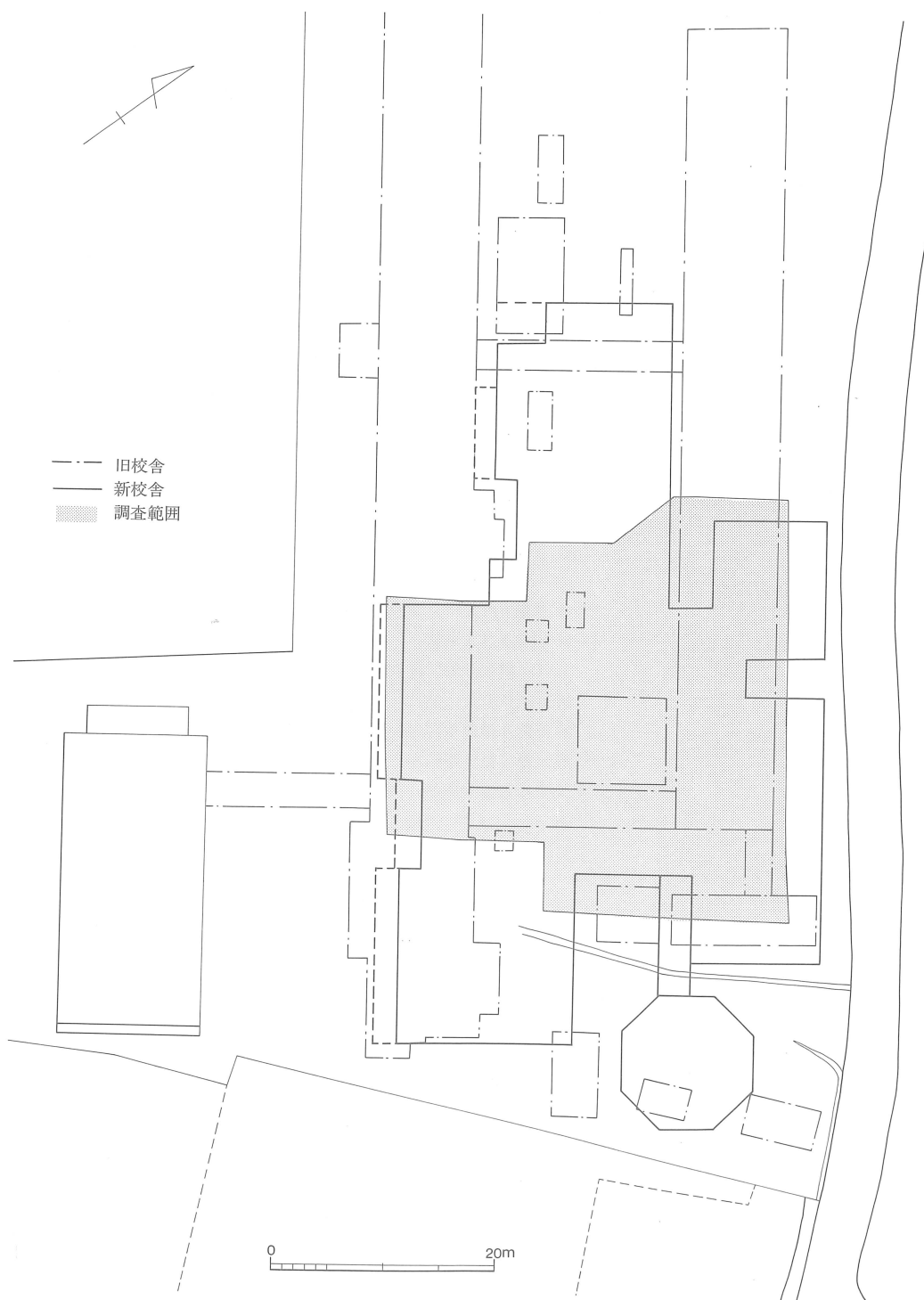


Fig. 4 北山小学校遺跡周辺図 (1/600)

III. 遺構と遺物

1. 概要

発掘調査は小学校校舎改築部分のほぼ中心1117㎡について行った。昭和33年に現在地に校舎を建設した際に東側の高い部分は削られていて、そこには基盤の黄灰色砂礫層が現れた。もとの丘陵は西の方に低くなっていて、茶橙色～黄橙色の粘質を帯びた砂質土が砂礫層の上に遺存していた。遺構検出面の標高は43.00～43.75mであった。

検出されたのは土塋〈SK〉4基（円形3，長方形1……落し穴），不整形の土塋〈SX〉21基

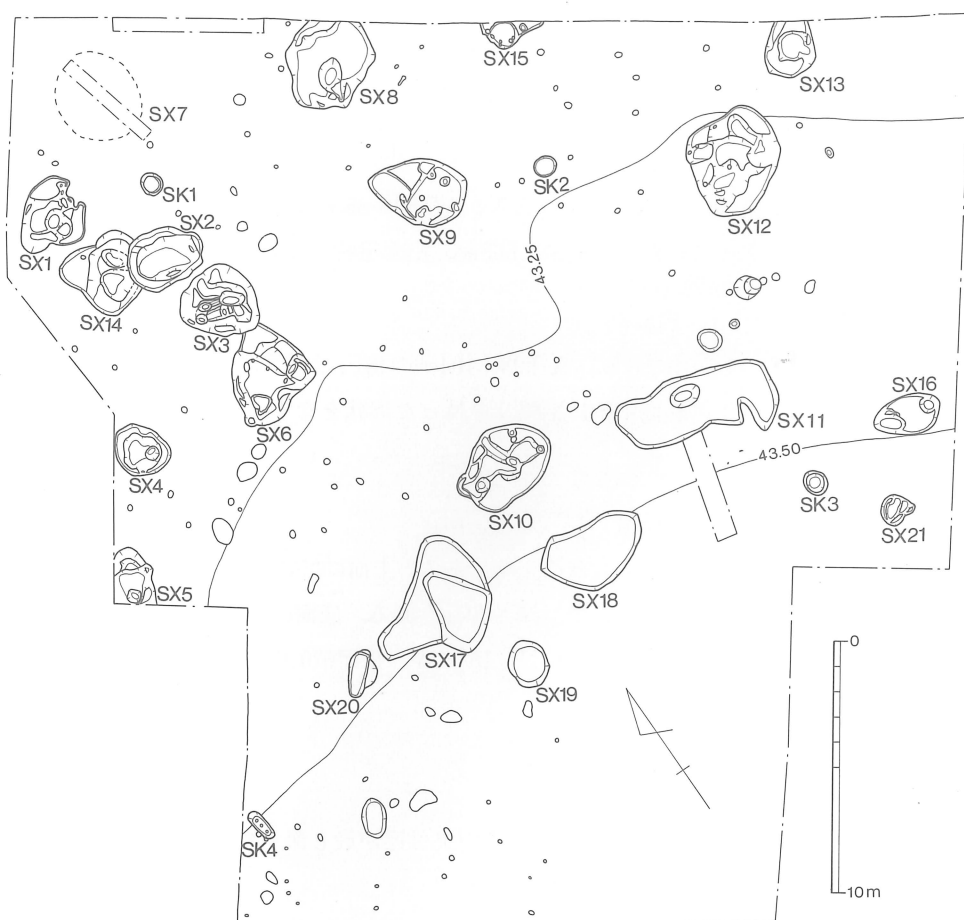


Fig. 5 北山小学校遺跡遺構配置図 (1/300)

(大型18, 小型3), 小ピット群である。不整形土壌の大型のものについては、塙のほぼ中程に地山に近い黄色系の砂礫土があって、それを取りまくように茶色ないし黒色系の砂質土が入り込んだもので、いわゆる“風倒木”の痕と称されてきたものに類するが、そうとのみ片づけるわけにもないようである。遺物としては押型文らしい縄文土器片と打欠石錘、叩石、礫器が出土したのみである。ピットは大半が茶褐色土を埋土としているものの、まとまるものはない。なお、SXとした不整形土壌は7・11の2基は完掘しておらず、17・18・19の3基は下層より黄色砂質土が現れはじめたところで発掘を中止した。従って図面も省略している。

2. 土壌

1号土壌〈SK1〉 (Pl. 3, Fig. 6)

調査区の北端近く、SX1の東にある。上面は直径86~91cmの円形、底面は幅42cm、長さ72cmの隅円長方形を呈する土壌で深さ98cmを測る。本来は平面形も長方形であったと思われる。黄茶褐色土を埋土としていた。平面積0.635㎡、主軸方位N-9°-W。出土遺物はない。

2号土壌〈SK2〉 (Pl. 3, Fig. 6)

調査区の中央より北東の所、SX9の東にある。直径80~88cmの偏円形を呈する深さ15cmの浅い土壌で、茶褐色土が入っていた。平面積0.568㎡。出土遺物はない。

3号土壌〈SK3〉 (Pl. 3, Fig. 6)

調査区の東南部、SX11の南にある。直径93~104cmの楕円形プランを呈し、深さ115cmを測る。底面は直径45cmと狭く、断面中位は胴張りを持った形状をなす。茶褐色土を埋土としていた。平面積0.773㎡。

4号土壌〈SK4〉 (Pl. 3, Fig. 6)

調査区の西端部にて検出した落とし穴状の土壌である。上面にて幅50cm、長さ134cm、底面では幅27~37cm、長さ93cmの長方形プランで、深さ70cmを測る。底面には直径12cm、深さ12~22cmの小ピットが3個掘られている。主軸方位N-16°-W、平面積0.6㎡。出土遺物はない。

3. 不整形土壌

SX1 (Pl. 5, Fig. 7)

調査区北端部にある。長軸3.3m、短軸2.5mで中央付近が最も深くて0.68mを測る。平面積は5.68㎡。打欠石錘とサヌカイト片が出土している。

SX2 (Pl. 5, Fig. 7)

SX1の南東にあり、SX14を切っている。略東西方向に主軸を持ち、長軸3.2m、短軸2.3mを

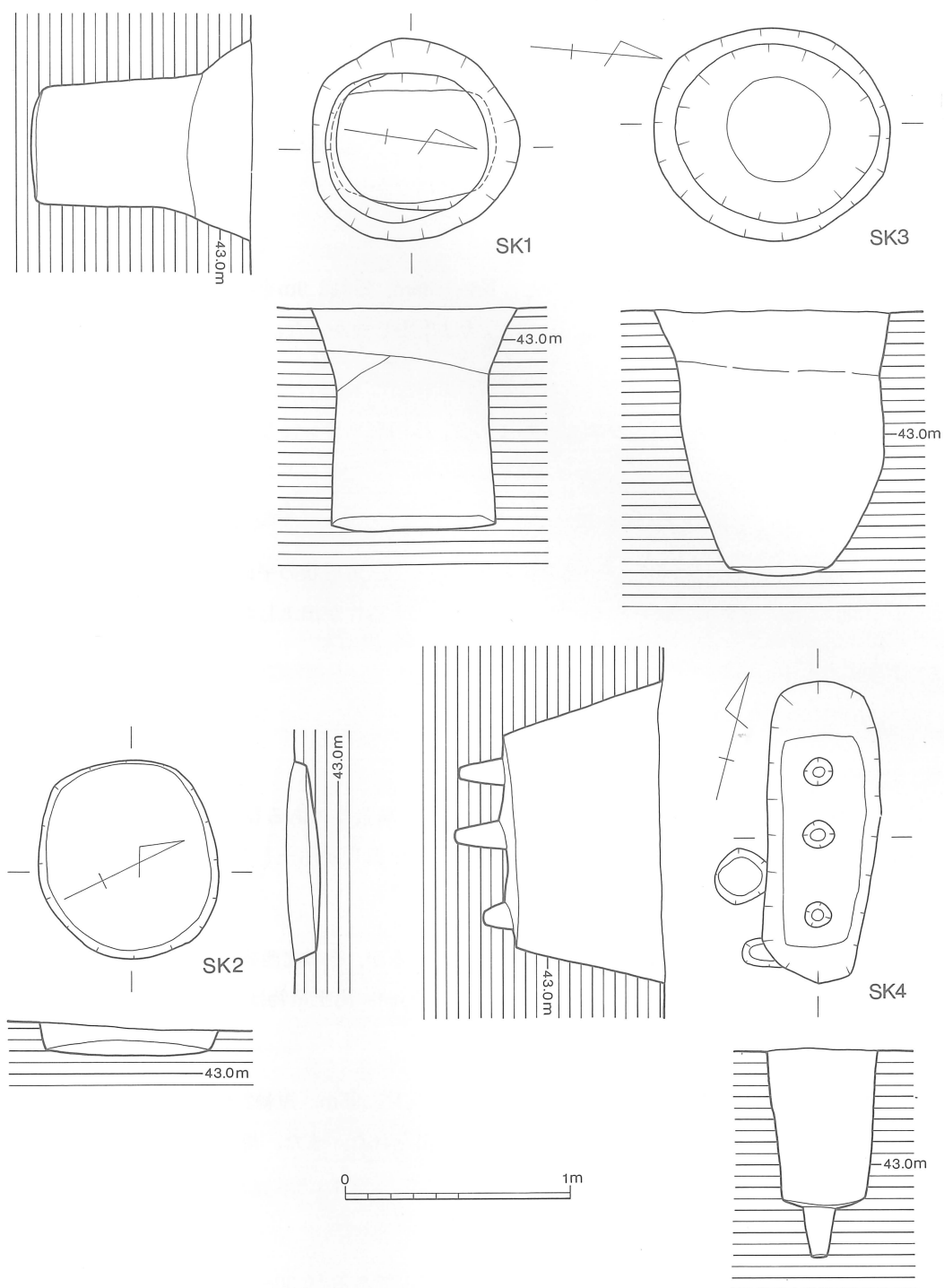


Fig. 6 SK 1 ~ 4 実測図 (1/30)

測る。底面はやや広めの平坦部がある。深さ0.65m。平面積5.9m²。埋土のうち黄灰色ないし黄褐色の礫層は大きく二層に分けられた。土器片と石器が出土している。

SX 3 (Pl. 6, Fig. 7)

SX 2 のすぐ南にある。平面は丸みを持った三角形状で長軸2.84m, 短軸3.3m, 深さ0.65mを測る。底面は起伏が多い。平面積7.07m²。出土遺物はなかった。

SX 4 (Pl. 7, Fig. 8)

SX 3 の西南にある。楕円形プランをなし、長軸2.35m, 短軸2.0mを測り、すり鉢状の最深部までは0.53mの深さがある。平面積3.51m²。遺物は出土しなかった。

SX 5 (Pl. 2, Fig. 8)

SX 4 の南西にあり、半分以上が調査区外にある。楕円形プランになるものであろう。出土遺物はなかった。

SX 6 (Pl. 6, Fig. 8)

SX 3 の南にあり、それに北端の一部を切られている。三角形状の平面プランをなし、東西3.55m, 南北3.2m, 深さ0.72mを測る。平面積9.04m²。土器片が出土した。

SX 7 (Pl. 7, Fig. 5)

これはトレンチを入れたのみで完掘しなかった。

SX 8 (Pl. 8, Fig. 9)

SX 2 の東方にあり、北東端部が調査区外にかかる。胴張りのある長方形プランになるらしい。短軸3.2m, 深さ0.72m。残存部の平面積9.56m²。土器片が出土した。

SX 9 (Pl. 9, Fig. 8)

SX 8 の南にある。北西部の突出した五角形状を呈するが、その北西側は一段高くなっている。長軸3.9m, 短軸2.68m, 深さ0.6m, 平面積は7.75m²。出土遺物はない。

SX10 (Pl. 9, Fig. 9)

SX 6 の南東にある。丸みのある五角形状を呈し、長軸3.95m, 短軸2.9m, 深さ0.5mで平面積は9.15m²。東端部にて上面に近い所から焼土が検出された。また、焼成を受けたと思われる土の塊が出土している。

SX11 (Pl. 2, Fig. 5)

SX10の東にある東西に6.4mと長い土壇状の落ち込みであるが、30cmほど掘り下げたところで

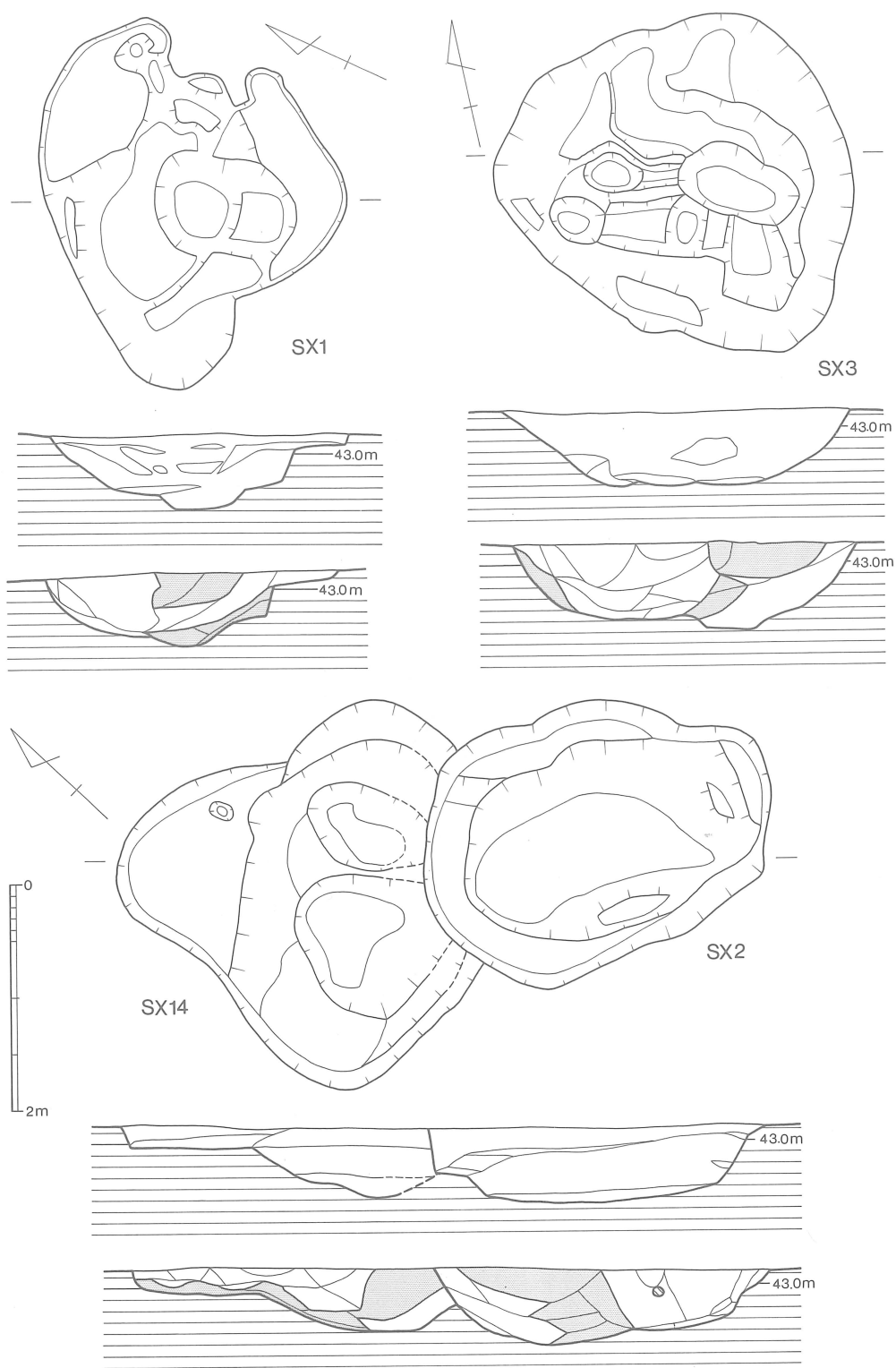


Fig. 7 SX 1 ~ 3 · 14実測図 (1/60)

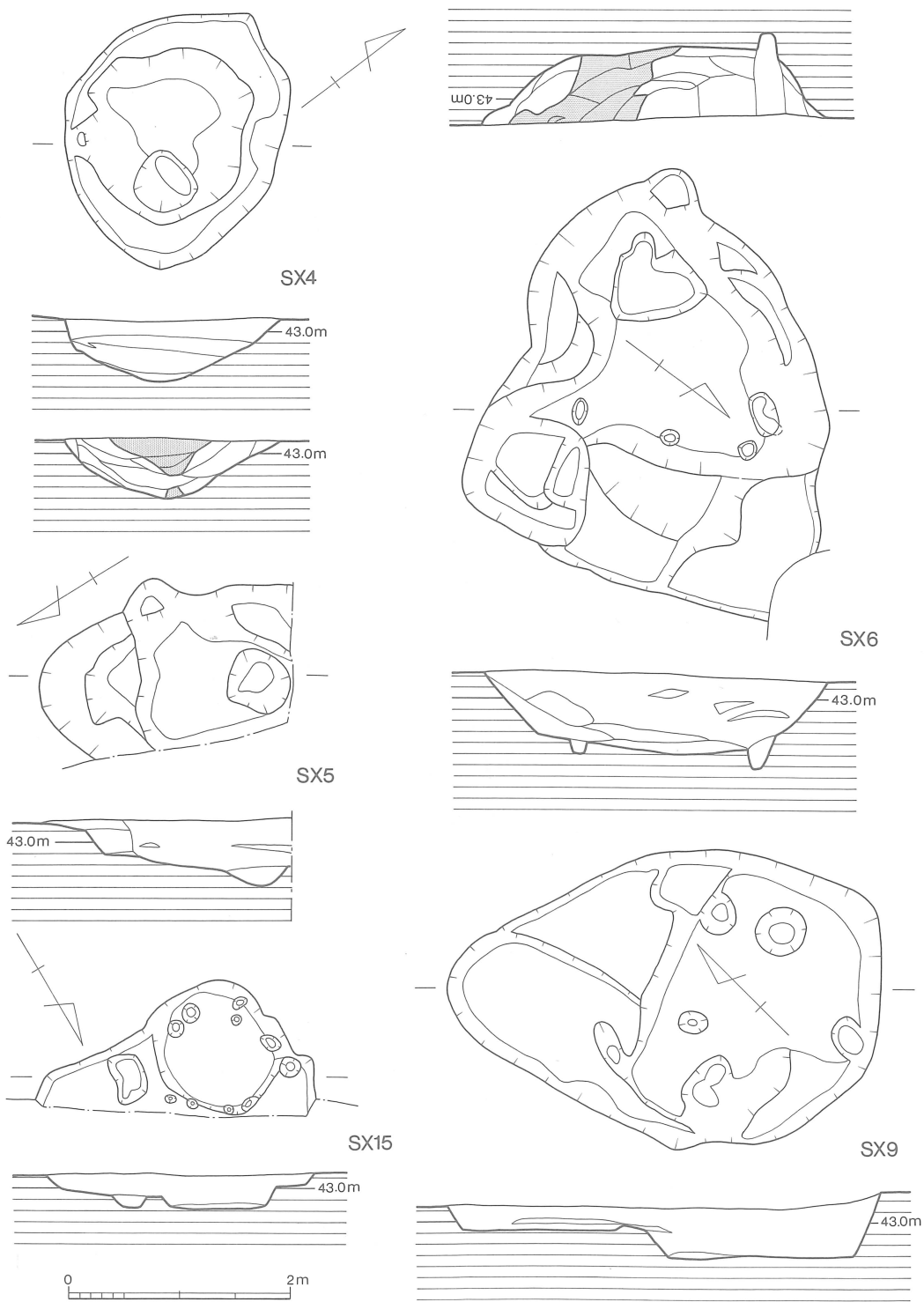


Fig. 8 SX 4 ~ 6 · 9 · 15実測図 (1/60)

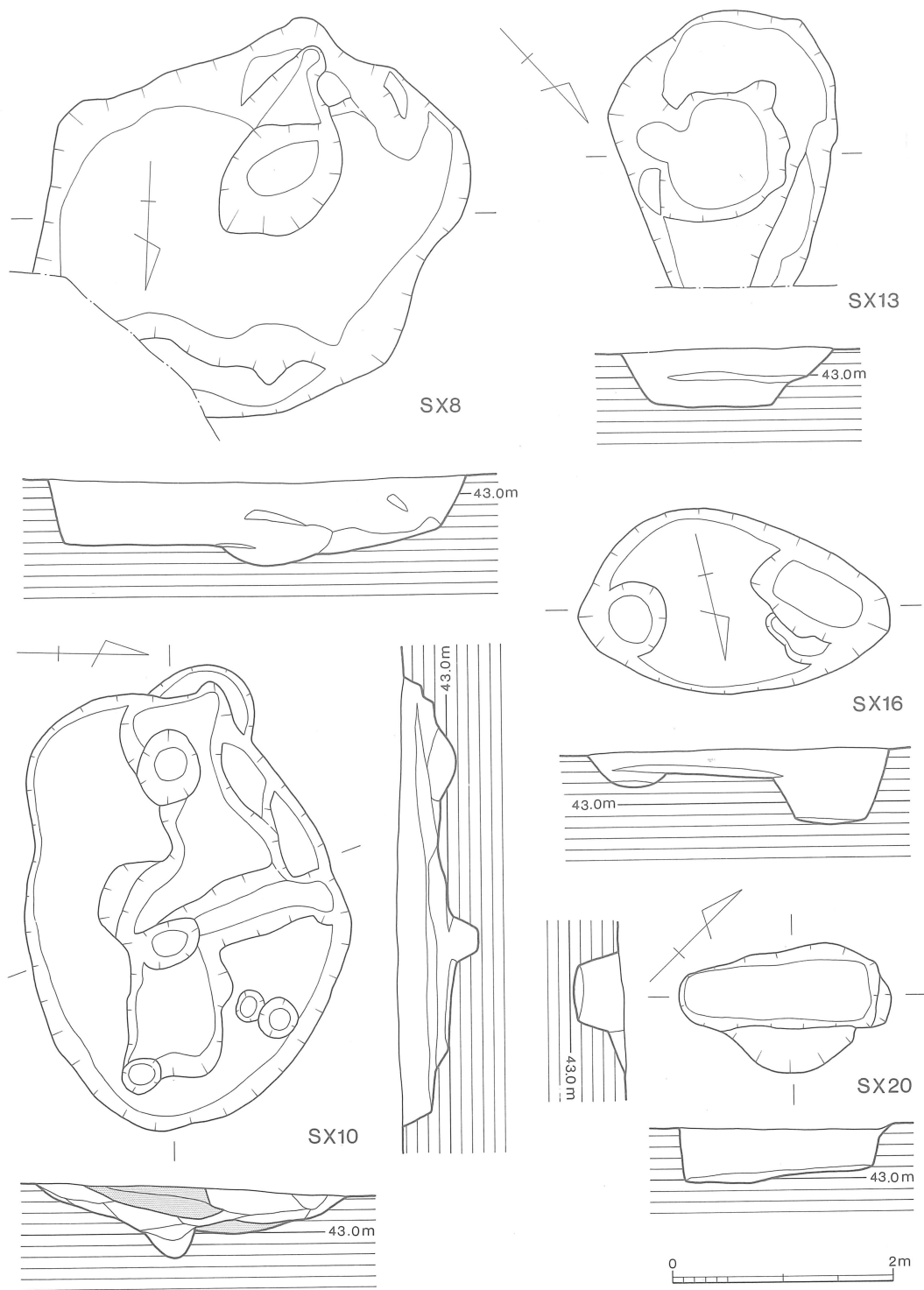


Fig. 9 SX 8・10・13・16・20実測図 (1/60)

中止した。他の土壙とは趣を異にする。

SX12 (Pl. 8, Fig.10)

SX 9 の東南方にある。平面は五角形に近い形状で、面積は11.8㎡。長軸4.5m, 短軸3.65m, 深さ0.62mを測る。出土遺物はない。

SX13 (Pl. 2, Fig. 9)

SX12の東北にある。一部が調査区外にかかるが楕円形に近いプランであろう。短軸2.06m。現状での平面積は4.06㎡。縄文早期かと思われる1×1.5cmほどの大きさの土器片が出土した。

SX14 (Pl. 5, Fig. 7)

SX 2 に東側を切られている。西側がテラス状になるが、本来はSX 2 と直交する方向の長楕円形プランであったと思われる。いま南北3.15m, 東西3.45mを測り、底面には大きく二つの窪みがある。深さ0.6m。現状の平面積6.8㎡。礫器が出土した。

SX15 (Pl. 2, Fig. 8)

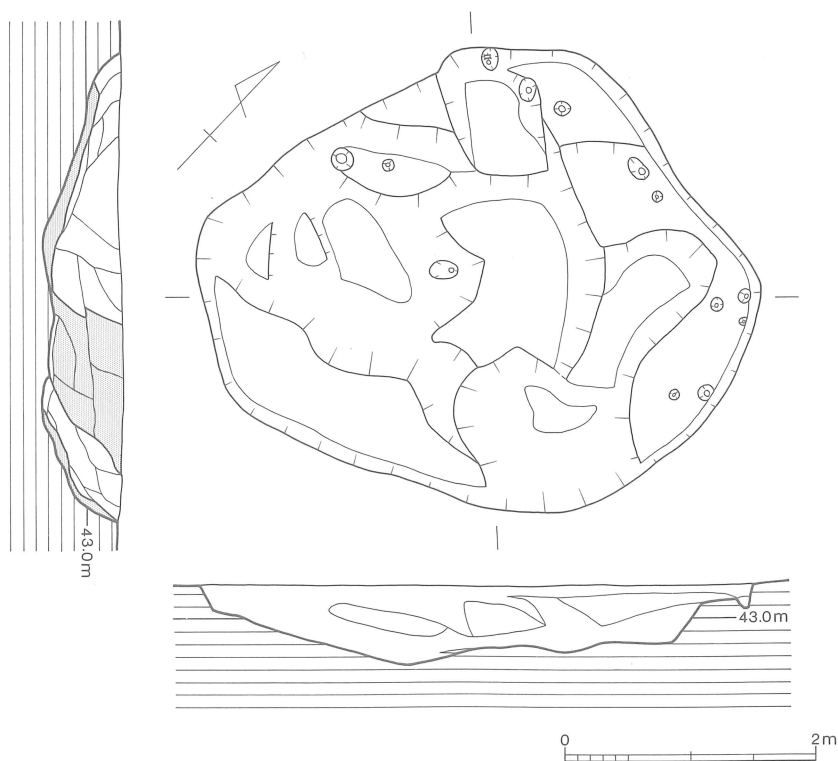


Fig.10 SX12実測図 (1/60)

SX 8 の東にある。一部分しか検出できず、大半は調査区外にある。南のコーナー付近に焼土が存した。

SX16 (Pl. 2, Fig. 9)

調査区の東端部にある。卵形の平面プランで長軸2.82m、短軸1.65mを測り、西端部は深さ0.7mのピット状となる。平面積3.42m²。上面に近く石錘が出土した。

SX17 (Pl. 2)

SX10の西にあり、黄色砂質土が現れ始めたところで掘るのを中止した。上面の東西長5.4mを測る。石錘が出土した。

SX18 (Pl. 2)

SX10の南にある。平面の東西長4.4mをはかるが、SX17と同様の落ち込みであった。

SX19 (Pl. 2)

SX17の南にある。長軸1.8mの小さなものでこれもSX17と同様である。ただここには焼土が存した。

SX20 (Pl. 2, Fig. 9)

SX17の西にある。底面で長さ165cm、幅35～53cmの長方形プランを呈し、幅の広い東側のレベルが高いなど一見土墳墓風であるがそうではない。埋土は茶褐色砂質土であった。

SX21 (Pl. 2)

SK 3 の東南にある。直径1.25mの小さな円形プランで、平面積1.13m²、深さ0.3m。

4. 出土遺物 (Pl.10, Fig.11・12)

a. 土器

全て縄文土器である。1はSX 2 の出土で1cmほどの厚さがある。山形の押型文があるようにも見えるが定かでない。焼成あまく脆い。早期であろう。

2は試掘時に出土したもので、SX 6 出土の3と同じ種類としてよい。内面に煤が付着している。

3はSX 6 出土。厚さ1.5cmの分厚い土器片で角閃石・長石・赤褐色粒子などを含み、焼成はややあまい。内面には煤が付着している。早期であろうか。

4はSX 8 出土。外面に撚糸文か押型文を持つ底部付近の破片である。角閃石・長石・白色粒子などを含み、焼成はややあまい。二次熱を受けた痕跡がある。

b. 石器

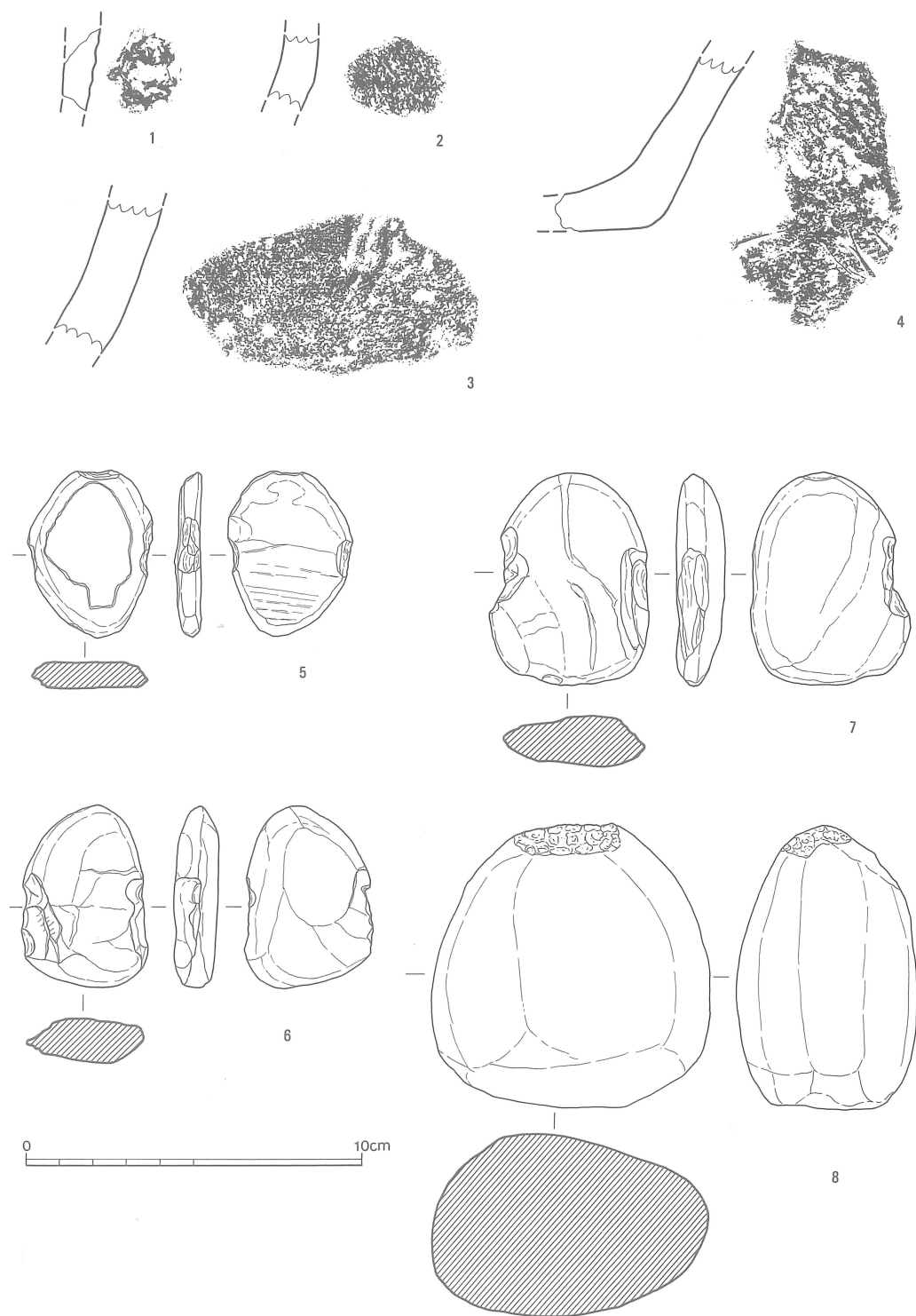


Fig.11 北山小学校遺跡出土遺物実測図1 (1/2)

5はSX17出土で、扁平楕円形の長辺両側を打ち欠いて袂りを入れた石錘である。長さ4.9cm、幅3.7cm、厚さ0.8cmで重さ20g。雲母石英片岩であり、表面には石英質の薄い層が見えている。

6はSX1出土の緑簾片岩と思われる石材を用いた打欠石錘である。打欠きの仕方は粗々しい。長さ5.4cm、幅3.8cm、厚さ1.3cm、重さ40.1g。

7はSX16出土で、やや大振りの石英片岩を用いた打欠石錘である。所々に石英質の脈が見える。長さ6.3cm、幅4.8cm、厚さ1.5cm、重さ57.8g。

8はSX2から出土した叩石として用いたと思われる石器である。平面は三角に近い偏円形を呈し、その頂点部分に打突による剥離がある。他の面は擦れて滑らかな状態にある。長さ8.4cm、幅8.3cm、厚さ5.3cm、重さ535g。玄武岩と思われる石材である。

Fig.12の9はSX14出土の礫器で石英質の硬い石を素材にしているが、剥離痕にフィツシャーやリングなどが良好に観察されるような良質なものである。素材の形態は長方形な礫が平面的に、自然に半割されたもので、その割れ面の稜や突出部はかなり風化し磨滅している。

長さ20.4cm、幅9.3cm、厚さ6.1cmで、重量は約1.3kgである。剥離は片側面と頭部にのみ行われていて、上半部分はA・B両面へ施されている。まずB面への剥離が5回ほど行われ次いで、A面へ6回ほどの剥離がされているが、各々の面における各剥離面の切り合い関係はそれほど判然とはしていない。

縄文時代早期あるいは旧石器時代のものかと考えられる礫器は当立花町に隣接する瀬高町・山川町でこれまでかなりの量発見されている。これらの遺跡は総じて「清水山遺跡群」として特異な地域を形成しているが、今回この立花町での例によりその範囲が拡大されたわけで、今後いっそう周辺調査が必要となったといえる。

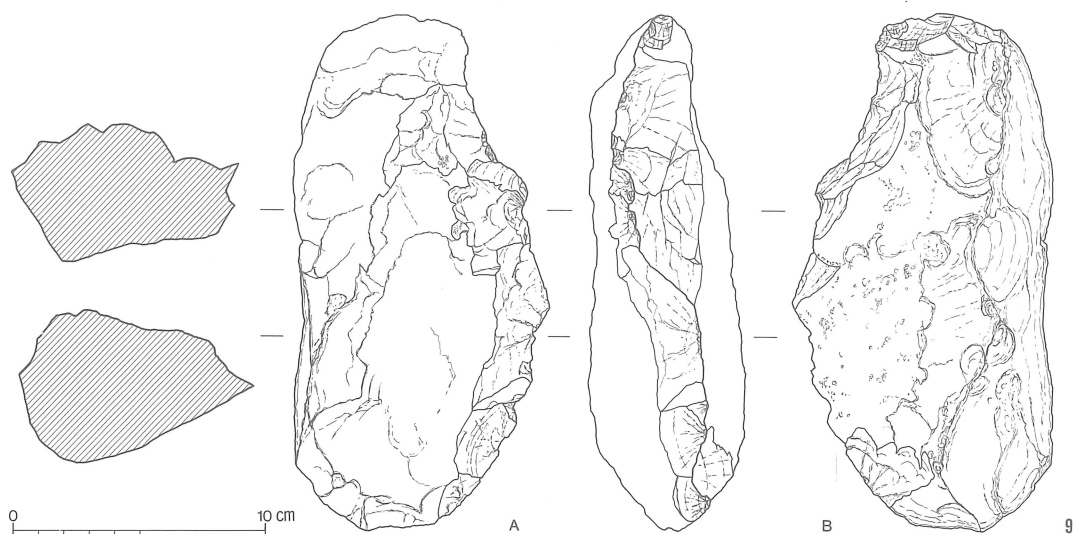


Fig.12 出土石器実測図 (1/3)

IV. おわりに

今回の調査で検出したのは、落とし穴としての長方形土壇1基と性格不明の円形土壇3基、形の定まらない不整形土壇としたもの21基であった。

落とし穴のSK4は幅の狭い長方形プランを呈するもので、底面に小さなピット3個が並んで掘られている。これは今までの九州での検出例からみてもかなり細長いタイプとしてよい。円形土壇としたSK1～3のうち、SK2は浅すぎて問題外であるが、他の2基についてはあるいは落とし穴として捉えてよいかもしれない。そうすると、SK4とは形態を異にするので時期が違ふとみた方が妥当かもしれない。

筑後川以南の筑後地区での落とし穴検出例はまだそれほど多くはなく、矢部川以南では今回の発見が初めてであった。今後は発掘調査の増加とともに類例も増えていくことだろう。^(註1)

不整形土壇とした21基のうち、完掘していないSX7・11・17・18と小型のSX19～21を除いた残り14基を見ると、それらは全てがあまり深くないすり鉢状を呈する中に、小ピットやおおよそ意図的とは考えにくいような掘りこみがあること、また検出時の状況としては楕円形プランのほぼ中央に地山とほぼ同じ土があってその回りを黒い土が取りまくという特徴が指摘される。このことをして、これらが自然の営みの結果として起こったこと、すなわち“風倒木”の痕跡ではないかとする考え方があった。しかし、そうするとSX10やSX15で見られた焼土の存在、あるいは埋土中から土器片や石錘が出土していることの解釈など、人が介在しない自然の作用による結果としてのみ扱うことには無理があるように思えるのである。

^(註2)
八女市大字緒玉の池上遺跡では押型文土器が出土した“円形竪穴遺構”5基が検出されている。この遺構も北山小学校遺跡の不整形土壇としたそれとほぼ同じである。これを住居関係の遺構とするか否かはさておいても、何らかの人為的所作が働いた遺構ではないかと考えるものである。問題はその特異な埋土の状況であり、これの解釈にかかってこよう。いまはこの種の遺構が人為的なものも含まれるであろうことを提示しておくにとどめたい。

註

1. 近年になって筑後市森ノ木遺跡、八女市上柳遺跡、三潴郡三潴町道手牟田遺跡でも検出されている。

筑後市教育委員会『蔵教遺跡群』	筑後市文化財調査報告書 第6集	1990
八女市教育委員会『上柳遺跡』	八女市文化財調査報告書 第21集	1991
三潴町教育委員会『道手牟田遺跡』	三潴町文化財調査報告書 第2集	1993
2. 八女市教育委員会『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報3』

	八女市文化財調査報告書 第21集	1992
--	------------------	------

PLATE



北山小学校遺跡遠景（西から）



北山小学校遺跡遠景（南から）



全景（南から）



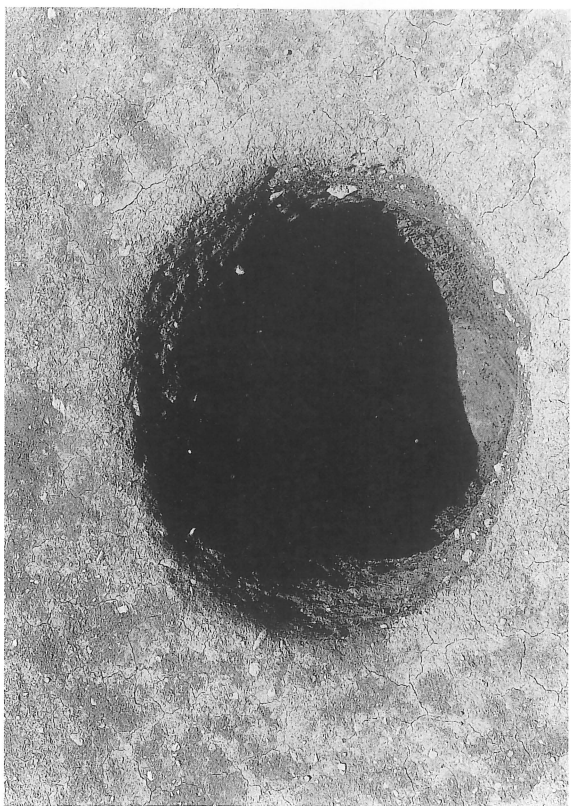
全景（北から）



SK 1



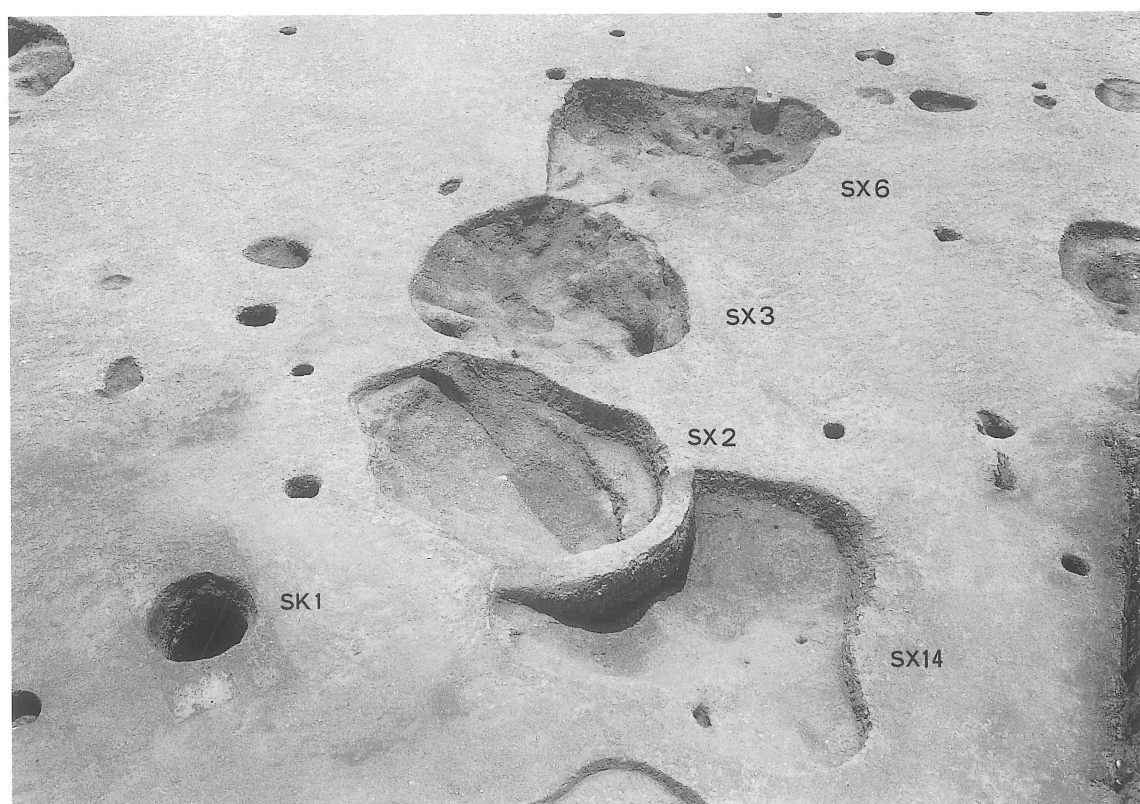
SK 2



SK 3



SK 4



SX 2・3・6・14、SK 1（北から）



SX 2・14（南から）

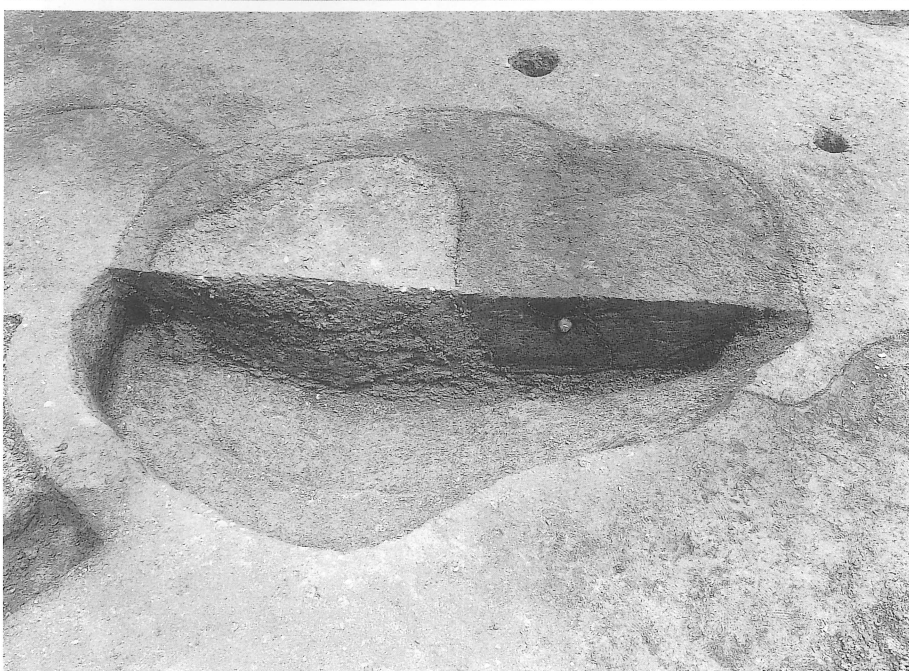
SX 1
(南西から)

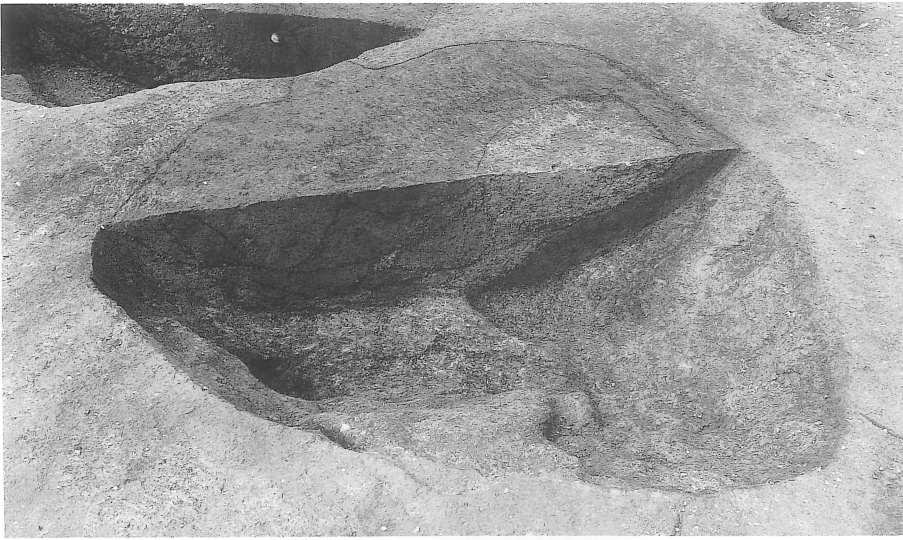


SX14
(南から)



SX 2
(南から)





SX 3
(南から)



SX 6
(南西から)



SX 6

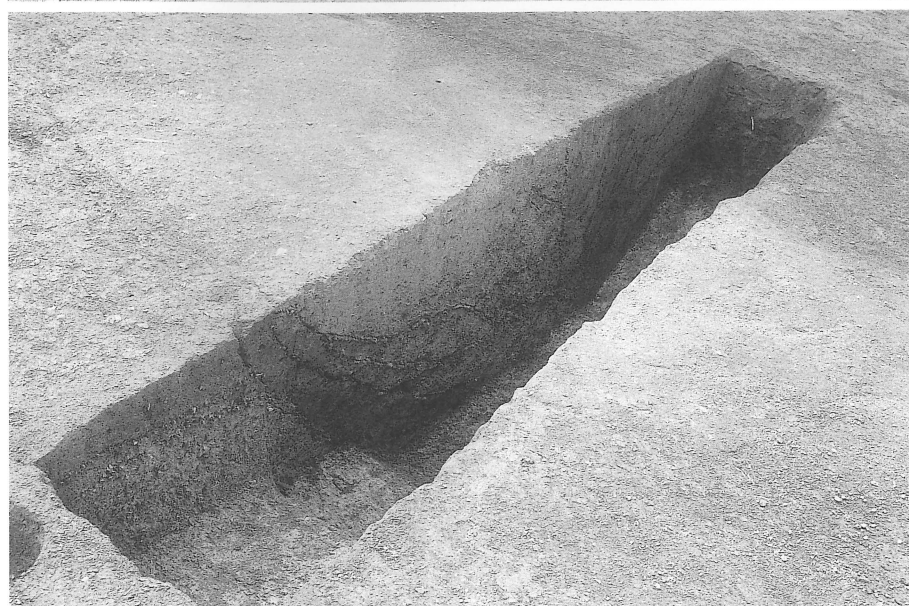
SX 4
(南東から)



SX 4



SX 7
(東から)





SX 8
(南から)



SX12
(南西から)

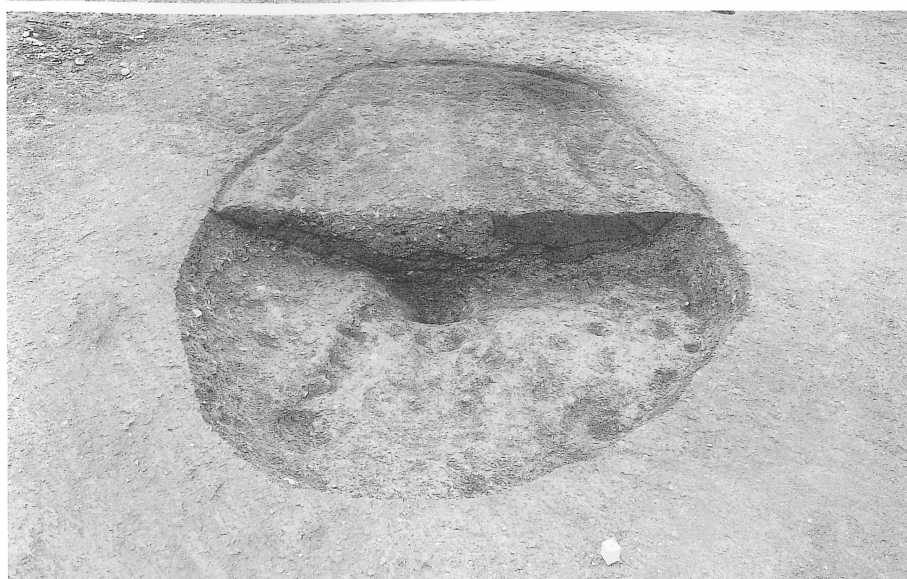


SX12

SX 9
(西から)

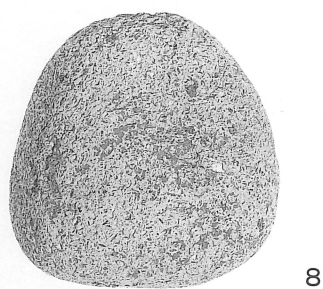
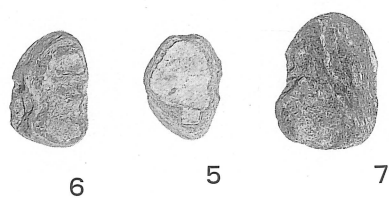


SX10
(東から)



SX10





北山小学校遺跡出土遺物と立花町出土鉄鋌

立花町文化財調査報告書

第1集	大塚古墳	1984
第2集	曲松遺跡	1985
第3集	鬼隈横穴群	1987
第4集	小倉谷横穴群	1991
第5集	北山小学校遺跡	1993
第6集	北山今小路遺跡	1993

北山小学校遺跡

立花町文化財調査報告書
第5集

1993（平成5）年3月31日

発行 立花町教育委員会
福岡県八女郡立花町大字谷川1130

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8-34
電話 092（751）7431